

カンボジア村落部織物業における生産組織の変容

市場経済化以降の村落内・村落間の分業化を中心に

朝日由実子(上智大学アジア文化研究所 共同研究所員)

生産単位が小規模な手工業は、従来、「近代的製造業セクター」に比較して「伝統的セクター」として牧歌的に語られることが多かった。しかし今日では、そうした近代的社会と伝統的社会を対立的に描くのではなく、その接合の在り方を研究することが求められている。実際、伝統的と言われる手工業の生産組織にも、経済的な合理性と非合理性の間を行きつ戻りつつ、あるいはその両方の面を内包している場合がある。また個々の手工業の事例を通じて、そもそも、諸社会における「経済的組織」と「その他の社会的組織」との関係性や、「合理性」の概念自体の検討も根本的な課題として挙げられる。

本報告では、初めに、先行研究や報告者の調査研究により明らかとなった、カンボジア村落部の手工業を代表する手織物業の業態について紹介する。次に、その具体的事例として、報告者が2005年以降調査を行っているカンボジア南東部ブレイ・ヴェーン州シトー・コンダール郡PL村における、高級絹緞織物「ホール」の生産形態とその変容について取り上げる。特に1993年の新政権発足以降、本格化する市場経済化を背景としたホールの需要の拡大に伴って、加速する近年の村落内・村落間の分業化の背景と要因について、社会関係などの側面から考察を試みることを目的とする。

カンボジアにおいて、従来、手織物業は、綿花栽培および養蚕が盛んであったとされるメコン河沿岸の人口稠密地帯を中心に盛んに行われていた。生産単位は基本的に世帯単位であり、主に農家女性の農閑期の副業として、高床式住居の床下に「カイ」と呼ばれる大型の水平織機を置き、生産されてきた。歴史的には、フランス植民地期の安い綿布の輸入による打撃による減産や、長らく続いた内戦やポル・ポト時代により寸断されたが、その後いくつかの産地では復興し、現在も手仕事による機織りが続けられている。

報告者が調査対象とするPL村は、国内におけるホールの二大産地の一方の中心地であり、換金作物の畑作と織物業を主要な生業としている。また、メコン河支流沿いのPL村は、かつて河川交通の要衝でもあり、州都からの距離はあるものの河川から離れた周囲の「稲作を生業の中心とする村落」にはほとんどない商業や織物業など多業種への就業の機会があるため、郡内で唯一の「経済村」に指定されている。高級絹織物生産については、1980年代の社会主義時代を通じて、都市部の富裕層がかなり限定されていたため、絹織物の需要はなかなか拡大せず、生産への意欲は高まらなかった。また生産者も経済的に余裕があり、代々技術を保有する住民に限られていた。

ところが、市場経済化の影響で、都市部の富裕層が急速に拡大し、特に2002年以降、結婚式や儀礼で着るためのホールの需要が急増し、価格も高騰する。その結果、PL村の織り手の生産意欲は今までに無く高まり、生産力拡大のため、ホールの生産形態に大きく分けて以下の3点のような様々な変化が生じている。第1に、市場経済化以前には、同じ織機で必要に応じて自家消費用の織物と商品用織物など多品種の織物が生産されていたが、近年では、効率化のためほぼホールのみを単一品目に生産が特化されるようになったこと。第2に、従来「女性の仕事」とされていたホール生産による収益が、畑作による収益を凌ぐようになったこともあり、若年層を中心に男性の織り手が少しずつ増加し、性役割別分業に変化が生じている。第3に、多くの織り手は、都市化などによる世帯内での労働力不足や、作業時間のさらなる短縮のために、一部の作業手工程(「括り」、「緯糸の染色」、「経糸のセッティング」など)を外部委託化する傾向にあり、「ネアック・トバーニュ」(織り手)と呼ばれてきた生産者は「ムチャハ・カイ」(織機の持ち主、織元)と呼ばれる雇用主へと変化している。また、雇用の範囲は、当初村落内の近隣住民であったが、徐々にその範囲はPL村を超え、周辺の稲作村の親族関係にない住民へとも拡大してきている。生産組織が、時間的、空間的に拡大する中で、それを管理する織元は、自身の一定の効率化の努力に満足しているものの、委託生産者の仕上げ具合を日々憂慮し、精神的には以前より疲れを感じているという声も良く聞かれた。それでも、他人に任せるのは「オッ・トアン」(間に合わない)という焦りがあるのだと言う。こうして、PL村では、分業化の過程で空間的に、村落内部に織物生産が集約化されていくというよりも、村落内部の非熟練者の家屋や近隣の村落との間に生産のネットワークが形成され、より分散化する傾向にある。

【手工業、手織物業、分業、生産組織、女性労働】